

校訓 「敬天愛人」

光門坂

月田小だより
➤月増刊号

令和4年7月27日(水)

校長 中井 良徳

月田小学校HPは で検索!

自分の体を自分で守ろう



けがの応急手当について劇で伝える保健委員会の児童

6月30日(水)、保健委員会による「保健集会」を行いました。

テーマは「けがをした時の応急手当を知ろう」です。

保健委員会の児童は、本番に向けて、休み時間に練習をしてきました。

劇ありクイズありで、最後まで集中して参加することができました。

鼻血の止血方法、すり傷や火傷などをした時の自分でできる手当の方法が分かりました。

最後に、けがを予防する4つのポイントを紹介してくれました。4つのポイントは次のとおりです。

- くつをきちんと履くこと
- 爪を切ること
- 運動前には準備運動をすること
- 生活リズム(睡眠・朝ごはん)を整えること

けがを予防するためには、普段の生活を整えることが大切さであることも伝えてくれました。

なぜ学校で学ぶのか？

「どうして勉強しないといけないの？」

いつの時代も大人を悩ませる子供の疑問です。

「いい学校に入るため」

「今のうちに勉強をしておかないと後で困る」

「なりたい職業につくため」

将来のことを言われても、子供はなかなか自分の将来像をイメージすることはできません。

教育のプロや各界の著名人は「人生の先輩」としてどのような回答をしているのでしょうか。

■広い視野で世界を見るため（教育・子育てアドバイザー、鳥居りんこ）

■子どもの「生きる力」を引き出すため（教育ジャーナリスト、おおたとしまさ）

■生きる上で役立つものを選ぶため（将棋棋士、羽生善治）

■これからの時代に必要な能力を伸ばすため（教育学者、汐見稔幸）

■“学び方”を知るため（筑波大学准教授、落合陽一）

■たくさん失敗して成長するため（教育評論家、石田勝紀）

さすが、各界で活躍されている方の言葉です。キーワードは、「広い視野」「生きる力」「生きる上で役立つもの」「これからの時代に必要な能力」「学び方」「成長」。

日本の高度成長を支えた「正解」をいかに早く覚え、再現するかという従来の教育は、「答えのない時代」を迎えた今、うまくいかなくなってきました。

昨年1月、中央教育審議会（文部科学大臣が重要な施策制定するにあたり意見を求める有識者の組織）が「令和の日本型学校教育」を示しました。

その中には、「子供の学び」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」を実現することで、「子供の資質・能力の育成」を図ることが示されています。分かりやすく言うと、子供一人一人の目標に向けて、異なる方法で学習を進める中で、多様な他者と異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出すことで、子供の力を伸ばそうということになります。

話が変わりますが、先日、映画『みんなの学校』で有名な大阪市立大空小学校初代校長の木村泰子さんと、哲学者・教育学者である熊本大学大学院准教授の苫野一徳さんが参加されたオンラインの対談の中で、木村さんが、学校で学ぶ意義を次のように言われていたことが心に残りました。

「他者と一緒に誰もが生きやすい社会をつくる大人を育てることが学校の役目だ」

学校が、知識を得るだけの場所ならば、AIで個別最適化された学習をしていけばいいのであって、学校に集まる必要性は感じられません。

しかし、現実社会は一人の力で全てが解決できる訳ではありませんし、一人で解決する必要もありません。互いが協力しあって解決していけばいいのです。その際に、互いの思いや考えはなかなか一致しません。心をつににするなんて難しいことです。

大事なことは「対話」です。まずは、相手の考えを全て受け入れ、テーブルの上に言葉を重ねていくと、完全に一致しなくても、互いが納得できる言葉が見えてきます。これこそが、学校で学ぶ意味だと思います。

そして、日々の生活の中のトラブルも学びの絶好の機会となっています。大人は子供の本音を聞き、対話を促して納得が得られるような関わりをしていきたいものです。